

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～

若林範子作「恵信尼さま」(パッチワーク)



特集号

響流山勝福寺
親鸞聖人 恵信尼公
七百五十回御遠忌法要

今、本堂に恵信尼さまが

親鸞聖人・恵信尼様のお念仏を聞きたいと歩んできた御遠忌法要も、多くの人々のお力添えをいただいて円成することができました。遠くに目指していたことが、今は過去となり、背景になったのだが、「親鸞様 なぜお念仏なの？」というテーマだけが残って、「お念仏が申されるようになったかね？」と問いかけている。

それから本堂余間には、恵信尼様の御影が。お仏飯をお供えしながら私は、恵信尼様はこんな所に祀られることなど願っていないでしょうに、と思いながらも、にこやかにどつしりと満足してここに来ておられるお姿に、なにかしら喜びを覚えている。

貴族から武士へ権力の転換期、血みどろの闘争があり、天変地異の災害にも苦しみました。その末法濁世に、親鸞という破戒の僧との結婚を決意し、越後での流罪の生活、さらに関東では底辺に生きる群萌の一人となって、共にお念仏申しつつ家庭生活を営まれました。晩年は、遠く京都と越後に離れて、それぞれのつとめを果たされたのでした。

弥陀の五劫思惟の願は、ひとえに親鸞一人がためであったと述べ懐かれた親鸞様と同じく、恵信尼様も自立した一人として、ご自身の一生をおえられたのでした。その一人は、「孤」ではなく、「個」でもなく、阿弥陀仏の大悲心に根を下ろした「一人」なのでした。今、勝福寺本堂にて、「あなたもご苦勞さま。なむあみだぶつ」と私たちを見守ってくださいます。

(藤谷純子)

御遠忌写真館

二年半前に思い立ち、「親鸞さま
なぜ お念仏なの？」― 出会おう
語ろう 今ここで」のテーマを掲げて歩んできた御遠忌事業も、十一月二十
三日、二十四日の法要でもって円成しました。参詣された方々と共に勤めた
法要の一部を写真によって振りかえってみます。

恵信尼公七百五十回 御遠忌法要

十一月二十三日(土)

午前十時 音楽法要

午前十一時 記念法話

講師 渡辺愛子先生

講題 親鸞聖人と共に歩んだ

恵信尼さま

―在家仏教を開く―

午前十二時 お斎

＊昼食休憩中 お抹茶の接待

(中園れい子社中)

午後一時半 「御遠忌慶讃踊り」

午後二時 記念イベント

薩摩琵琶演奏 櫻井亜木子

「花ごぶしー恵信尼さま

を憶うー」

(渡辺愛子作詞)

「敦盛」(『平家物語』より)

午後三時半 閉会



御遠忌委員長・開式の辞



御遠忌法要当日の朝



恵信尼公750回御遠忌法要・表白



コールハイマートによる音楽法要



御遠忌慶讃踊り



かはづの会有志のメンバー



記念法話・渡辺愛子先生



四日市別院を借りての記念イベント
櫻井亜木子氏による薩摩琵琶演奏





お座敷では作品展
(後藤あやめさん作・絹の機織り)

**親鸞聖人七百五十回
御遠忌法要**

十一月二十四日(日)

午前十時 御遠忌法要
午前十一時 記念法話
講師 狐野秀存先生
講題 ただびとなりて祖聖
に続かん

午前十二時 お斎
午後一時十五分 記念イベント
一人芝居

午後二時 「妙好人 おつれじまのお軽」
感謝状授与
記念講話
講師 渡辺浩晃氏
講題 勝福寺縁起
午後三時十五分 餅まき
午後三時半 閉会



かわいいお稚児さんによる供燈・供華・供香



散華(さんげ)



親鸞聖人750回御遠忌・表白



楽入りの勤行



総代さんたちへ感謝状



御遠忌記念法話・狐野秀存先生



御遠忌記念イベント 一人芝居



最後に餅まきで締めくくり



記念講話 渡辺浩晃氏

皆さまの願いと力が一つになり御遠忌法要を円成することができました。有り難うございます。今回の御遠忌法要を遂行するにあたり、色々な部門で力を尽くしてくださった方や、参詣された方に感想文を書いていただきました。

みんなのまとめ役 御遠忌委員長

総代長 向野 茂

念願であった「響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌法要」が、令和元年十一月二十三・二十四日の両日に厳修されました。なごやかな温かい法要であったと皆様からのお声が聞こえてきました。

この大行事が無事に取り行われたのは、お寺さんのご家族を中心に、役員の方々、ご門徒の皆様、そして多勢の有縁の方々のご協力を頂いたおかげだと厚く感謝申し上げます。ありがとうございます。今回は特別に、親鸞聖人の伴侶である恵信尼さまの法要も実施したことです。記念法話をされた渡辺愛子先生の



渡辺昌敏作 山号額

要請でお招きした琵琶奏者の櫻井亜木子さんが、恵信尼公のご苦勞を琵琶の語りで幻想的な雰囲気演奏して下さい、別院本堂の隅々まで響きわたる満員の聴衆を魅了しました。お天気にも恵まれて、永い勝福寺の歴史がこの日に継承され厳修されました。改めて皆様方のご協力に対し深く感謝とお礼を申し上げます。

23・24日の司会

かはづの会 渡辺 久仁子

勝福寺の御遠忌も終わり、日々時は移ろいでいます。いつもなら何事も終了と共に薄らぎ遠のく事象とは異なり、今回はしっかりと記憶として残っています。特に23日の音楽法要、24日の雅楽の入った勤行法要は新鮮且つ厳かで、今でも歌声や雅楽の音色が耳に残っています。

振り返りますと、平成23年の東本願寺の御遠忌、それから東別院での御遠忌（東別院ではおかみそりの儀式も受けさせて頂いていました。）にも参拝させて頂いていました。が、勿体なくも意味も分からず、ただ後について行くだけの参拝でした。

今回、無知ゆえに23日・24日の午前の司会の大役を引き受けました。縁の下の力もちの方々大きな支えのもと、大失敗もありましたが、とにかく無事に進行し終了しました事に心から感謝しています。

仏縁浅い私ですが、御縁を頂く度に一歩ずつでも歩を進めていきたいと思えます。今度は色々有り難うございました。

恵信尼公のパッチワーク を作成

かはづの会 若林 範子

本山、別院の御遠忌法要から、勝福寺でも御遠忌をと、二年半、何度も実行委員会を重ねました。十一月二十三、二十四日当日を迎え、ほぼスムーズに出来たのは各部会の方々、ご門徒さん達の努力の賜物でした。

二十三日の恵信尼公の音楽法要も初めての経験でとても良かったです。渡辺愛子先生の法話で恵信尼様の遠く離れて暮らす聖人様を思う心の深さのお話しをして頂き、心に染み入りました。

お昼休憩の間、かはづの会婦人会の方々の御遠忌慶讃踊りも練習不足でぶっつけ本番状態でしたが、大成功だったと思っております。

櫻井亜木子先生の「花こぶし」と「敦盛」の琵琶演奏も素晴らしく、初めて聴く薩摩琵琶の音色に心引き締まる思いでした。

私事ですが、恵信尼様のタペストリーを作りますと、手を上げたものの、いつまでも腰の上がない自分に焦りながら、皆さんから「もう出来た？」と聞かれる度に、ヒヤリとしながら、十一月十三日に出来上がりホッと胸をなでおろしました。そして本堂に飾って頂き、本当に有り難く思います。

二十四日御聖人様の法要も厳肅に始まり、かわいい稚児さんの供燈・供華・供香がとても可愛く大人よりしっかりと出来ました。狐野秀存先生の法話や妙好人「むつれじまのお軽」の一人芝居、記念講話、餅まきとすべて心に残る法要でした。

この法要に御遠忌委員の一人として関わらせて頂き、仏法に逢わせて頂いた思い出に残る法要でした。皆様お疲れ様でした。

勝福寺史の編纂

編纂委員長 渡辺 重昭

出来上がった二〇四ページの冊子をみて感慨深いものがありました。

当初は百パーセントも思っていました。が、たくさんの方に読んで頂きたいという住職の思いで写真をふんだんに使った内容になりました。私も写真と感想文で亡くなった30年近くになる父を見つけ、父がお寺に通っていた頃の姿を思い出しました。皆さんは如何だったでしょうか？

さて、資料としてお寺の古い写真や記録を預かって読んでいきながら、どのような形の寺史が相応^{ふさわ}しいのか、出来るのか悩みました。結局、タイトルにあるように「勝福寺の歴史とあゆみ」としました。

一般的に寺史というとお寺の歴史が主役で学術的なものが多いのですが、この寺史は、勝福寺の歴史と知道住職と純子坊守の31年の歩みと、二本立てで編集したので、身近な方のことが載っていて親しみ

易いものになったのではない
でしょうか。どうぞ、楽しみ
ながら、そして思い出しなが
らお読みになって下さい。

ご縁を頂いて

小若女 弘子 (高家)

勝福寺様の親鸞聖人、恵信尼様の七百五十回御遠忌の大法要が十一月二十三、二十四日に勤修しんしゅうされました。

この法要の勤修に当たりましては、二十ヶ月前から月一回の「お待ち受け法要」を、ご講師のご出講を仰いで聞法を重ねてお待ちしたことでした。住職様、坊守様を中心に各役員さん方、門信徒の皆さんの並々ならぬ、親鸞様、恵信尼様への敬慕と讃仰の気持ちが一つになって盛大に実現したことを思います。

二十三日にお参りさせて頂き、先ずお内陣のお莊嚴の素晴らしさに感動、中でもお仏華の素晴らしさに心奪われました。ご尊前に合掌。このご縁に遇わして頂けることの重々無尽のご縁を偲び感慨が溢れたことでございます。

法要は音楽で始まりコール
ハイマートの皆さんの合唱
「衆会」「四弘誓願」等、私
も聴聞席より一緒に歌わせて
頂きました。仏教婦人会の皆
さんの和服姿でのご遠忌慶讃
の踊りも法要に花が添えられ
ました。

渡辺愛子先生の恵信尼様讃
仰のご法話、そのお声の優し
さ、内容の深さに恵信尼様が
彷彿としたことでした。作品
展、お齋、御抹茶のお接待も
頂き薩摩琵琶の音色にも聞き
惚れたことでした。

この度のご勝縁、まことに有り難うございました。

南無阿彌陀仏

勝福寺御遠忌法要に
お遇いして

澤田 和子（大阪市）

今回、勝福寺坊守様から「お里帰りのつもりでお参りしませんか」と、ご案内を頂き、大阪よりお参りさせていただきました。

久し振りの勝福寺様に着くと、もうすでにきれいにお荘厳された御堂いっぱいのお参

りの方で、里のお寺（松林寺）の坊守様が待っていてくれてご一緒にお参りさせていただきました。すぐに恵信尼様七百五十回御遠忌法要がコールハイマートの合唱で始まり、渡辺愛子先生作詞「花こぶし」の中に恵信尼様がきびしさの中に一念仏を伝える強いお心が伝わって参りました。司会をはじめ女性の方々の活躍に嬉しく思いました。

次の日の親鸞聖人七百五十回御遠忌法要は可愛いお稚児さんの供燈、供華、供香の後、雅楽が入り厳かに勤行が始まり、御堂中に正信偈が響きわたりとても感動いたしました。

その後、狐野先生のご法話「ただびととなりて」の中で

「凡夫こそが本願の正客です」と話されたお言葉が心に響きました。午後からは四日市別院の広い御堂でお齋を頂き、両日ともそれぞれ法要にふさわしいイベントで櫻井亜木子さんのすばらしい薩摩琵琶の演奏、一人芝居「むつれじまのお軽」の熱演を目のあたりにして妙好人さまを見る思いがいたしました。

この二日間の法要を通し、

ご門徒様の熱心なお姿にふれ、改めてお念仏の大切さを教え、いただきました。親鸞聖人・恵信尼さまを讃嘆さんたんされるすばらしい法要にご縁をいただきました。本当に有り難うございました。楽しいお里帰りが出来ましたことお礼申し上げます。合掌

姉妹で供燈

キム花夏・優夏 (山本)

・とても大きい仏様で、見るのは四回目だったけど、いつもおどろきます。

・ 仏様にろうそくをあげる時、一度やり直しがあつたけど堅張せずにもうそくをあげることにできました。

・ ろうそくの持ち方や歩き方を氣をつけてやりました。しんけんに、そして楽しみながらお参りする気持ちでした。

・あとでげきも見ました。一人でやっていてとてもすごかったです。

・さいごのおもちまきもたの
しみました。

・一緒に出た人とお友達になれて良かったです。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 記念法話

ただびとなりて
祖聖に続かん

狐野秀存先生



講題の意味

今回講題として「ただびとなりて祖聖に続かん」という言葉を出させてもらいました。まず最初の「ただびとなりて」というのは、親鸞聖人が父のごとく、母のごとくと念じてこられた聖徳太子のお言葉からいただきました。

後半の「祖聖に続かん」というのは、そうした聖徳太子のお心を「今日の私どもにまで導き教えて下さった祖師聖人です。親鸞聖人に続かん！」と呼びかけて下さった信國 淳先生

の言葉をいただきました。

ただびとなりて

聖徳太子が作ったといわれる『十七条憲法』の第十条の中に「我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ」という言葉があります。

今から千四百年以上も前に、人はみな「ただの人」なのだと言いつつたのは驚くべきことです。世界にはほこるべきことです。なかなか「ただの人」としてお互いに認めることができない私どもでありますけれども、じゃあどうしたら「ああ、

お互いに凡夫だったんだなあ」と、「ただの人として今靜いをしていたなあ」と、そういうふうに分自身を本当に省みることが出来るか。その道を開くのが最初の第一条と第二条であるわけです。これも一緒に読んでみましょう。

一つに曰く、和らかなるをもつて貴しとし、忤うること無きを宗とせよ。

二つに曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。

御臨末の御書

伝説として、親鸞聖人のご遺言だということでも私も真宗門徒の間にずっと言い伝えられてきた「御臨末の御書」というものがあります。

我が歳きはまりて、安養浄土に還歸すといふとも、和歌の浦曲のかたを浪の、寄せかけ寄せかけ帰らんに同じ。

一人居て喜ばし二人と思ふべし、
二人居て喜ばし三人と思ふべし、
その一人は親鸞なり。

我なくも法は尽きまじ和歌浦 あをくさ人のあらんかぎり

「青草人」、これは先ほどの聖徳太子の十七条の憲法で言えば、凡夫、ただの人であります。みんな青草人、ただの人となつて祖聖に続いていきましよう、と信國先生は呼びかけられたわけがあります。

大切な道標の一里塚としての法要

聖徳太子のお心を受けて、文字通り凡夫の仏教、凡夫のための本願ということをして九十年の生涯をかけてあきらかにしてくださったのが私どもの御開山、親鸞聖人であつたということ、そのことを今度は七百五十年後の、そして八百年後の私た

ちが、自分たちの日々の生活を通して確かめていく。南無阿弥陀仏の中で、親鸞聖人のお弟子となつていく、そういう大切な道標としての一里塚の御法要が、昨日今日と、さらにもっと前からですね、皆さんのお力添えによって行われてきたこの法要であろうと思うことであります。

(聞き書き担当者感想)

御臨末の御書を読み返せば親鸞聖人のお心がひとと伝わってきます。狐野先生には、お念仏の心、御遠忌法要の意義を明らかにしていただきました。有ること難し。

南無阿弥陀仏 (釈 和敬)

勝福寺のホームページで法要やイベントの動画を見ることができま



す。どうぞ訪問して下さい。

ご門徒さんこんにちは！ 第十七回

今回は、親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌法要で行った作品展にご夫婦で出品して下さった渡辺敬二・玲子夫妻を訪ねました。

ご夫婦は、四日市の通称「川の上」で長年「えびす湯」という銭湯をなさっていました。しかしオイルショックの影響で営業を続けることが難しくなり、平成十一年に廃業しました。現在は、ご主人の敬二さんは三十歳の時に起業した行政書士をし、玲子さんは安心院の出張所や文化会館、四日市の公民館などのビルメンテナンスをなさっています。

玲子さんは、毎日朝早くから仕事場に行っていて、なかなか休みが取れません。そんなハードな仕事をしているためか、今までに三度嘔吐したことがあるそうです。心配したご主人が病院に連れていって診察してもらった原因は肩こりだったのではとしたそうです。後奥さんの肩こりが激しくなるとご主人が肩をもんであげているそうです。

玲子さんは現在六十八歳、国東の出身で四人兄弟の長女です。二十四歳の時、三歳年上の敬二さんと結婚されました。馴れ初めは敬二さんとは遠縁にあたり親戚の紹介でした。玲子さんは初めて会った敬二さんを「この人なら」と一

お寺でお友達を！

渡辺敬二・玲子（四日市）

目で気に入ったそうです。

ご主人の敬二さんは、四日市で生まれ、玲子さんより三つ年上の七十一歳。七人兄弟の六番目で三男です。ご住職の知道さんとは小中高の同級生でもあります。大学時代は東京で過ごしていましたが、父親が亡くなり、母親一人で「えびす湯」を経営することになったため、母親を手伝うために大学を卒業してすぐ四日市に戻りました。結婚後しばらくして、銭湯は母親と奥さ

んに任せて、自分は大学で学んだ法律知識を活かして行政書士事務所を開きました。

さて、先日厳修された御遠忌の作品展に出品していただき、「わあ可愛い！」と大好評だったお人形さん。作り始めたきっかけを玲子さんに尋ねると「結婚すると同時に姑さんと交代で番台に上がり、そこで店番をするんですが、時間が経たないんです。それで編み物などをしていたんです」と。そんな折、妹さんからも

らった人形がとても気に入ったので本を捜して独学で作りました。今、お寺から出品を頼まれたので、新しく作った人形や以前作って押し入れにずっとおとしていたお人形の髪の毛や衣装を新調して出品してくれました。同じく作品展に絵画を出品してくれた敬二さんは、いろんな展覧会に出品して沢山の受賞歴があるプロの画家でもあります。敬二さんに絵を始めたきっかけを尋ねると大学

時代、下宿していたアパートの隣に画家がいて、そこに遊びに行くようになり、その方の勧めで始めたそうです。四日市に帰郷後も先生について研鑽を積まれました。平成二十七年には宇佐神宮に能楽堂を描いた50号の作品を奉納し、現在は宝物館に展示されています。

玲子さんは、勝福寺婦人会の役員（会計）を二〇一一年



お人形さんを真ん中にして
敬二さんと玲子さんご夫婦

から三年間してくださいました。私が「仕事や主婦業もあつて大変だったでしょうね」と言うと、玲子さんは「大変だったけど、今まではお風呂の番台に一日中座っているだけで、人と付き合うことが少なかつたけど、婦人会の役員になり、いろんな人と知り合い、話が出来て、とてもよい経験になった」と話してくれました。そんな玲子さんを「ご主人は

「とても忍耐強い人で頑張り屋さん」だと話してくれました。玲子さんにも「お見合いで、この人ならと見込んだご主人でしたが、どうでしたか？」と尋ねると「間違いなかった。この人と結婚して良かった」とニコニコしながら答えてくれました。とても強い信頼関係で結ばれたご夫婦だと感心しました。

最後に玲子さんに勝福寺やご門徒の方々に伝えたいことがないか尋ねると「勝福寺の雰囲気はとっても温かい。だから今のままでいいと思います。でも、私はお寺は年をとってから行くものと思っていたので、お寺の役員をやってみていろんなことが分かり、とても良い経験になりました。そしていろんな人と知り合いになれた。そんなお寺の良さを皆さんに知って欲しい。知らない人が多くて残念。もっと皆さん、お寺に来て下さい」と呼びかけるように話してくれました。

お人形さんは作った人に似ると言いますが、仲睦まじいお二人の話を聞きながら、あのような温かい人形ができた理由が分かりました。

（文責 渡辺 重昭）

母を語る

いつまでも元気で
母ちゃん！

奥永 光字郎 三光下深木



母は昭和2年10月13日生まれで今年の誕生日で、満92歳になった。実際に生まれたのは、9月20日頃だと言っていた。

当時は新生児が死亡する確率が高かったので、一ヶ月ぐらい様子を見て戸籍に登録することが多かったらしい。母のお母さんが42歳で母を生んでいた。4人兄妹の末っ子で、二人の兄と姉とは、一回り以上も年が離れていた。

母が物心のついた頃は、姉はすでに結婚し、兄達は兵隊として戦地に赴いていた。一人っ子のように、両親にかわいがられていたらしい。子供の頃から、農作業が好きで、

親にかくれるようにして、水田でコロ（稗を除去する道具）

を押すのが特に好きであった。

又、牛のお世話をするのが日課であり、田んぼの畔草を鎌で刈り取り、それを毎日の餌としてやっていた。牛が成育し業者に売られて行く時は、母は涙ぐんでいたそうだ。

そんな母も結婚適齢期を迎え、同じ地区の父と結婚した。本当は母には好きな人がいて、その人から恋文をもらっていた。しかしながら、親の反対があった。その人は次男で財産（田、畑、山林）を持っていないだったので、親が許可しなかった。当時は会社員の給

料よりも、財産が一番の評価

であり、高収入が得られたからだった。その人は後に大出世をし、朝日新聞社の部長

になった人だった。私も幾度となく、その人と酒を酌み交わしたが立派な方であった。

父と結婚して、三人の子供（姉、姉、私）が生まれた。

父は若い時に結核を患い、完治したものの激しい農作業は無理であった。中津の小さな

パルプ会社（紙の原料を作る会社）に勤めながら家計を支えた。生活するのがやっとであった。そこで母は一大奮起し、養豚業をすることを決意した。朝5時から晩遅くまで、懸命に働いた。

母が45歳の時に父は肝臓癌で他界し、女手一人で3人の子供を育てた。

母の名前の萬亀子（まきこ）

は「鶴は千年、亀は万年」の諺に由来している。長生きをするようにと、母の姉の名前を千鶴子、妹の母の名前を萬亀子と父親が名付けた。親の願いもあっていまだに元気で

ある。しかしさすがに最近足腰が弱って、今は車椅子の生活である。

一昨年の7月に敗血症を患い、ほとんど絶望的な状態となった。病院から電話がかか

る度に、私はどきどきした。勝福寺の御住職に連絡を取り、最悪の場合の対処の仕方を相談した程だった。幸いに特効薬のおかげで、奇跡的に助かった。

しかしながら、今までのように家で生活することは困難になり、今は特別養護老人ホームで暮らしている。認知症予防のためにも、私はほとんど毎日面会に行き、わずかな時間ではあるが、会話をするようにしている。

願わくは、百歳までは生き、一世紀を生きた人間として天国の父親に報告して欲しいと思っている。

苦労続きの人生であったが、三人の曾孫も生まれ、平穏な生活を送っている。

「いつまでも、元気で、母ちゃん！」 合掌

編集後記

今回のひびきの中心は、親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌です。参加者等の感想を中心に載せました。

そして、ここでは紹介できませんが、この御遠忌に参加された方のアンケートを読ませてもらいました。ほとんどの方が音楽法要と琵琶演奏は初めての体験だったようです。その感想には、ほとんどの方が「感動した」と「良かった」という言葉が入っていました。読みながらその感動の様子が目に浮かぶようでした。新聞を作りながら改めて法要を思い出しています。

渡辺 重昭

お知らせ

十二月三十一日
四日市別院で除夜の鐘が
撞かれます。どうぞ。

正月元旦午後一時
勝福寺の修正会を勤めま
す。おせち料理が待って
ます。